コムトの人道教に就いて

安富成中

一

愛を主義とし、秩序を基礎とし、進歩を目的とす。これ今から約百年程前に、佛のオーギュスト・コムト(august comte)が提説せる教學の綱領であつた。而して彼はこの三つの綱目を、一人道の觀念に歸結し、これより人道學とも名くべき社會學を建設すると共に、更に進みて宗教としての人道教(Religion of Humanity)を開創するに至つた。彼が最初其實理主義の立場から、全然基督教を排斥し去つたにも拘らず、後に一種の宗教を説いて自ら其開祖を以て任ずるに至つたことは、思想の一貫を缺くものとして、學者の批難を招いた點であるが、このことを茲に論議する必要はない。しかし彼が加特力教の極めて敬虔なる信者の家庭に育ちながら、在來の教義に滿足せず、基督教的神觀を破斥して、別に新なる宗教を唱ふるに至つた社會的また心理的因由につきては、之を一般の問題として、相當に考究すべき價値あること、信ずる。そこでこれよりコムトの人道教が如何なるものであり、また如何なる必要から説き出されたかにつき、大略の叙述を試み、且つ之に對する一二の所見を陳べやうと思ふ。

二

初めに明にせねばならぬは人道の意義である。

それがHumanityの譯語であることは云ふまでもない。普通にはやゝ狹く、人間の特性たる仁愛の義に解せらるゝのであるけれども、コムトの用ゐた意味は更に廣く、質的にも量的にも全體としての人間そのものをさすのである。而して彼がこの人道をその教學の中心思想とせることは、一に歐西に於ける社會思想發達の結果と見るべきものであつて、從來人間の社會といふも、恰も烏の群か松の林の如く、たゞ多くの人々の集合に過ぎぬと考へられて居つたものが、コムトの時に及んでは、この人間社會にも一の法則の行はるゝことが明になり、彼れ自らこの法則を發見せりと思惟し、さてこそここの人間社會卽ち人道を對象として社會學なるものを建設するに至つたのである。卽ち彼れに於て初めて人道なるものが、單なる集團ではなく一の生命ある有機體として考へられたのである、既に有機體である以上は、それが生長し發達するものであることはいふまでもなく、この巨大なる一個の有機體に對しては、各個人は正に細胞若くは分子の如き關係に於て在る。而して生物界にありても、有機體のみが眞の實體として考へられ、それを構成する個々の細胞は獨立せる生命を有せざるが如く、全體としての人道のみが唯一の眞實存在であつて、個人といふは單に形而上學的の抽象觀念に過ぎない。これが彼の人道の概念であつた。

右の如く人道を以て、直ちに有機體そのものと見做すことは、固より決して正當なる見解といふことは出來ぬが、その批評は姑くこれを略し、斯の如き人道の考へから、如何に彼れの社會觀が演繹せられ、また彼の宗教論が唱へ出されたかを見やう。實にコムトの社會改造に關する考へが、すべて人道を完全なる一個の有機體とすることより論理的に引き出されたものであることは、一二の

例を以て證明することが出來る。例へば動物の個體にありて、すべての機官、組織、細胞等が、いづれもそれ自身の爲に存在するものでなく、それ等は互に他と連絡して、全體の幸福の爲に、從屬的關係に在るものであるが、それと同樣に、社會の各階級各個人も、社會全體の幸福の爲に、各其職能を分擔し、共同の一目的に對して從屬的地位を保つべきものとせらるゝ。而して有機體に於ける一々の機官が、定められたる官能以外に、自己の勝手をはたらく場合には、有機體の分裂を結果するが如く、社會にありても、各人が自己の天才や特質に打ち任かせて、任意の發達を遂ぐるならば、その結果はやがて社會の解體を來すものであると考ふるのである。かくて彼は自由とか、人權とかいふ思想は、社會をして無政府狀態に陷らしむるものであるとし、人は權利を主張するよりも義務に服從すべきものであると說いた。而して斯樣の立說が政治的專制主義に傾くことは自然の數であつて社會の秩序を維持するが爲に、個人の自由なる發達を阻止する結果となる。冒頭に揭げた通り、秩序を基礎とし、進步を目的とするといふは、コムトが敎學の綱領とするところであるが、彼がその社會論を進むるに隨うて、この二つの原理の矛盾がいよ〳〵明になつた。卽ちこゝに第三の原理たる愛を拉し來つて、人道を對象とし、愛を敎諦とする一の宗敎を提說し、以て右の矛盾を緩和し、また調和せんと試みたものである。他人の爲に生活せよ。これ彼が敎說の究竟的命題であつた。

三

抑々コムトの哲學的思想は、最も多くヒウムの影響を受くるものであつて、實理主義(Positivisw)である。彼の考ふるところによれば、吾人の知識

の對象となり得るものは、現象界のことに限らるゝもので、現象の背後にかくるゝ實在を求むるが如きことは、無詮であると共に無用である。人間思想の開展といふも、要するにかゝる實在の追求が、畢竟無用なることに目覺め來れることであつて、卽ちこれに神學的時代、形而上學的時代、及び實理的また科學的時代の三期を劃することが出來るのである。今日は既に信仰や希望に生命の支持を求め、若くは哲學的思辨に沒頭すべき時代ではない、飽くまで實理的精神の上に、科學を根抵として行動を律すべきであると說く。

斯やうの考へ方は、その自然の方向に從へば、不可知論(agnosticism)に陷るのであるが、而もコムトはこの不可知論的な原理から出發しながら、それより普通に、また自然に期待せらるべき結論に反對した。彼は事物の絕對的、客觀的實在と、吾人がその事物に對して有する意識との間に亘溝の存することを認め、客觀的に宇宙の根本原理に到達することは不可能であるけれども、而もすべての事物の知識を、必要と有用とに應じて、吾人の主觀的中心に集め來り、之に統一的原理を與ふることは主觀的綜合(sujective synthesis)に外ならぬと說くのである。

かく彼は宗敎に對しても同樣の論を進めた。萬物を創造し、之を主宰する神の客觀的存在を信ずることは、幼時の空想と共に消滅に歸すべきものであるが、吾人が情操の滿足を希ふ主觀的欲求は決してそれと同時に滅却するものではない。否、知力は寧ろ感情に統御せられて、始めて其效用を發揮し得るので、この意味に於て、吾人の知識が進めば進む程、宗敎の必要が加はり來るのである。しかし從來の如く、超絕的な、空想的な對象を信仰するのではない。具體的な、現實的なものでなければならない。卽ら人道こそ從來の神の觀念に

代つて、吾人の宗教的要求を滿足すべき崇拜の對象であるべきである。斯樣に說き來つて彼はその社會の改造策の上に必要とせし人道教を、その實理哲學の上にも打ち立つるに至つたのである。

コムトの教學全體に於ける人道教の位置、關係は大略右のごとくであるが、彼が在來の神觀を破斥して、人道を以て之れに代へんと企てた點につきては、今少しく仔細に考察することが必要である

四

コムトが人道を以て其新宗教の中心とするについて、第一にとつた手續は、在來信仰せられてゐる神位（Deity）を根柢から覆へし去ることであつた。而してこの企てを成就することは、彼れの時代の趨勢から察して、極めて容易であるかの如く考へられた。科學の燈炬は隈なく自然界を照破して、如何なる事象も自然の法則によりて支配せられざるものなきことが信ぜられた。自然の法則の普遍性が證據立てらるゝにつれて、天啓のはたらく範圍は次第に狹められて來た。從て天啓の上にその安定を保ち來つた神位の信仰も亦次第に微弱なるものとなつた。そこでコムトはかゝる信仰の絕滅は單に時間の問題であると考へたのである。彼の考ふるところによれば、少くとも神位に對する信仰は、他の方面に於ける信仰と同じく、科學が之を證明し得るや否やによつて、その成否が決定せらるべきである。然るに神の存在そのものは實は科學の證明を許さぬ絕對的事項であつて、到底人間の能力を以ては到達し得ぬ事柄である。科學は吾人に教ふるに、すべての事象はこれに先立つところの事象、若くはそれの周圍の事情に其原因を有することを以てするも、決してその究竟的原因が果して何者であるかを教ふるものではない

卽ち神位を信ずるは、恰も望遠鏡の達せざるかなたの大空に星の存在することを信ずるが如きものである。かく彼は神位の存在の知るべからざることを說き、更に進んで、それにも拘らず從來諸種の神々が信ぜられて居つたは何故であるかの理由を說明してゐる。蓋し幽靈の實在せざることを十分に證明するには、單にかやうのものは抑々信じ得られないといふことを明にした丈けでは足りぬ必ずや之に加ふるに、かゝる事柄が人間の主觀的作因によりて作り出され得るものであるといふことを明にせねばならぬ。そこで彼は人がこれまで神を信じて來たことは、決して偶然的事項ではなく、人の心に具はれる一の法則の避くべからざる結果であると說いた。この法則とは何ぞやといへば、人間は自然の法則が知られざる場合には、事象の原因をば、自分自身の意志に似寄りを持つ、ある意志の作因に歸するものであるといふことである。例へば子供がすべての自然現象をも人格化するが如く、未開人は自然界の法則が殆んど全く知られざる結果として、すべての事物の性質や運動をば、事物自身の內に存する意志の作用に歸した。これが生氣說若くは拜物敎（Fetishism）である。自然界の原因に關する知識が漸く進みて、觀察と經驗とにより、これ迄不定、不確實と考へられた事象の間にも、齊一と法則とが見出さるゝに至れば、多くの事象がいくらかの群にまとまつて來てそれ〴〵の群にそれ〴〵の神の意志が作用することが信ぜられる。これが多神敎である。しかし神は群のすべての事象に同時に內在することが出來ぬから、その存在は次第に高遠なるところに移され、その神を代表し若くは表徵する形而上學的の抽象觀念が、本質若くは根本原理として、その事象に附與せらるゝことゝなる。而して自然に對する知識が進むにつれて、神々の間にも權限の整

理を必要とすることゝなり、多神は竟に一神に統一せられて、こゝに一神教の發達となるのであるかく觀じ來るならば、自然界の法則が更に殘るところもなく發見せられ、すべての現象が自然の法則に支配せらるゝことが明となり、將來のことまでこの法則によりて精確に豫見せらるゝことゝならば。神の權限は次第に狹められて、終にはその救助を受くる必要もなく、その存在の證明せられざるがまゝに、全く無用視せられ、やがて吾人の記憶より消え失せることゝなるであらう。斯樣の論證によりて彼はまづ宗教の對象としての神位の存在より全く免るゝことが出來たと考へたのである。

五

かくてコムトはまづ從來の神の觀念を棄て去つたのであるが、而も一種の宗教的感情が、なほ依然として自己の胸中に生動しつゝあることを覺えたのである。彼はかゝる感情が果して人性に恒常的根據を有するものなりや、それとも單なる一時的性質のものであつて、既にその對象を失へる以上、やがて消え去るべきものなりやを考へて見た而して彼はそれが恒常的のものではあるが、これまで思想の開發が十分でなかつたが爲に、眞の對象を誤つて居たものであると解した。然らばこの宗教的感情の眞の對象は何か、何處にこれを求めたらよいか。これが茲に起り來る問題であつた。

新しき宗教の對象としてまづ考へらるゝものは自然界の法則であるが、これはコムトの考によれば、宗教の對象たる資格のないものである。何となれば既に述べた通り、事物の法則が發見せらるる場合には、その事物は最早崇拜の對象たる性質を失ふものであつて、吾々が崇拜し能ふものは、

何等かその事物の内に潜める意志の力によりて隨意的に作用を起し得るものに限らるゝからである。殊に既に自然を主宰する神の存在を否定せるより、自然は全く何等人間的意味なき、冷やかなる大塊となり、從て人間の心を之に托して、或は之を崇拜し、或は之を尊敬するといふが如きとは出來難いことである。全體宗教的感情そのものゝ性質を仔細に點檢するならば、それは愛とか、讃嘆とか、尊敬とかいふが如き、いづれも吾人が人間同士の間に經驗しつゝある情操であることを發見する。基督が人間の愛を喚起する所以のものは、決して彼が神の子であるといふ抽象的事實ではなくして、彼が具へて居つた美しい人間的性質であるのである。このことを考ふるならば、宗教の眞の目的たり得るものは、決して單なる抽象物ではなくして、何等か具體的實在であつて、しかも人間的性質を有し得るものでなければならぬ。是に於て宗教の對象たり得るものは、必ずやそれが一個の人間であるか、若くは若干の個人の集合であるか、若くは一般に人間種族そのものでなければならぬといふことになる。カアライルは偉人の崇拜を說いたが、それは偉人が神の心を地上に在りて最もよく代表し、表徵して居るからであつた。しかしコムトは神の心といふやうなものを認めぬのであるから、かやうの意味で個人を崇拜することを承認する譯にいかぬ。如何なる個人も一般的に宗教の對象たり得る程、しかも普遍的にして完全なる性質を具備する者はない。人間の進步は必ずや如何なる偉人をも忽ちにして凌駕するであらうと考へた。のみならず彼は個人を以て、人道なる一大有機體を組成する單なる細胞と見、獨立の生命なきものと見たのであるから、かゝる個人を以ては到底崇拜の對象となし能はぬのである。然らば則ち宗教の對象として、唯一つ考へらるゝとこ

ろのものはこれに吾人の生存を托し、その中に吾人が生活し、行動しつゝあるところの人道あるのみである。この偉大なる人道の流れに比べては、如何なる偉人といへども、そのながれに漂うてかつ消え、かつ結ぶ水泡の如きものである。吾人はこの人道に對して、滿腔の愛を捧げ、同情を感じ得るのみならず、吾々以上の存在として、之に十分の尊敬を拂ふことが出來る。要するに吾々は人道を崇拜し、吾人の生命と精神とを竭して、之に奉仕し、歸依することが出來るのである。神位は下降し人位は登臨す、これ彼が箴言であつた。

六

以上は大體コムトが人道を以てその宗教の中心とするに至つた思想の經過であるが、これより少しく彼の宗教論に對する批評を試みやう。

第一にコムトは、知識の問題を取扱ふ科學にありては、單に自然界の法則を知り得るのみであつて、神の存在につきては何等知ることが出來ない、それ故に吾人は神の存在を信ずべき何等の理由をも持たぬといふのであるが、これつきてはまづ知識と信念との關係を明かにせねばならぬと思ふ。抑宇宙の始原とか萬物の本質とかいふことに關する考察に於て、問題は決して人間の關係を離れて絶對的に存在する眞理が如何なるものかといふことに存するものではなく、必ずや人間の心性に對して相對的に滿足を與ふべき眞理は何かといふことに存するのである。この點はコムトが哲學は主觀的綜合である、實理は相對的であると說いたことと一致する。然るにコムトはこの實理卽ちものゝ眞理を求むるに、單に吾人の知性にのみ依賴して知性以外の心的要素などは全然度外視せることは何故であるか。吾人の考ふるところでは、實理とは吾人の心性に對して、調和的、究竟的滿足を與

ふるものでなければならぬ。かゝる實理を捕捉し得べき人間の綜合的心作用は、之を信と名け、かくして得たる想念は之を信念と名くる。客觀的に名けて實理と呼ぶところのものは、卽ち之を主觀的に名けて、信念といふのである。而して知は信の構成要素たるものであつて、知識は信念の構成部分たるに過ぎぬ。科學は主として知性の上に立つもので、從つてその結果たる知識は甚だ限局せらるゝところあり、直ちに以て吾人心性の調和的滿足を效果し得るものでないことはいふまでもない。單なる知性のみに賴りては、吾人の外界の存在すらも證明し得ぬものである。それにも拘らず吾人がかゝる外界を存在するものとして、安心して行動云爲する所以のものは、全く信の力である況んや宇宙の本源、若くは本體といふが如き問題に對しては、如何にもコムトの論ずるが如く科學によりては證明し得ぬ事柄であらう。さればとて直ちにその存在を否定せらるべきものでなく、吾人の信念として明に存立し得るものといはねばならぬ。

次に彼は事物の原因が明にせられざる場合には之をある意志の作因に歸すものであるといふ法則を立て、科學の進步によりて自然の法則が次第に明にせらるゝと共に、かゝる意志の作因は次第に其地步を失ひ、終に全く無用とせらるゝと說くのであるが、既に前段に述ぶるが如く、科學の造詣には自ら限界あり、如何に事象の連續が殘りなく證明せらるゝとも、その連續として可能ならしむる究竟の原因が科學の說明以外に在る以上は、矢張りこゝに偉大なる意志、卽ち神の存在を許すべき餘地を在するものといはねばならぬ。吾人は常に自己の生命の經驗より推して外界を觀察するものであつて、從て宇宙の究竟原因若くは本體を說明するにも、之を吾人の生活に深き關係を有せ

しむる場合には、吾人自らの人格を說明するに用ふる言葉に依らざるを得ない。殊に吾人が因果の關係を考ふる場合には、吾人の行爲は意志の作因に由るてふ、最も直接なる經驗より推して、自然界の根本原因に對しても、人間的意志を之に託寓せしむるといふことは極めて自然のことである。この點はコムトの法則を其まゝ承認して差支ないことゝ思ふのであるが、たゞ彼の論ずるが如く、科學の發達は決してかゝる意志の存在を消滅せしむるものでなく、却てかゝる意志の作用をますます醇化するものといふべきである。而してかかる意志の作因者たる神の信念は、實に吾人心性の調和的滿足を獲得する所以であると考ふるのである。

七

次が彼が人道を以て直ちに崇拜の對象となすに至つた點に就いても、吾人は到底贊同することが出來ぬ。彼は吾人の有する愛とか、尊敬とかいふ宗教的感情が、人道を對象とすることによりて滿足せらるゝから、之を宗教の中心とすることに不都合はないと主張するのであるが、實は吾人の宗教的感情が、人間を對象とすることによりて引出さるゝといふは、それ等の人間が人間以上の絕對的精神を表徵してゐるからであつて、此場合吾人の宗教的感情の眞の對象物は、決して相對的の人間そのものでなく、それ等人間の裡に潛める絕對的存在なのである。實際宗教は、その歷史的發達の過程に顧みても、事物の物的存在をばその儘直ちに崇拜するといふことはない。卽ち常にその事物に內在する、若くは之を主宰する、目に見えざる、或種の力を對象とし來つたものである。よつてこの發達の過程を追ふて將來の宗教を論ずるならば、同じく經驗界を超絕せるところに、その對象

を求めねばならぬ筈であつた。而して基督教が、自然神話より發達せる超絶的神觀を傳承し、維持し來つて、畢竟人間を從屬的地位に置いて滿足して居ることに對し、コムトが神位は下降し人位は登臨すと叫んで、かゝる神觀を破し、人道を以て之に代へんと企でたことは、之を我が佛教に於ける佛陀觀の發達等に顧みて、如何にもと首肯せらるゝのである。而も彼が經驗以下の現實的人道の觀念に停頓して、更に一歩を進むるの工夫を缺いたことは、その教説をして遂に宗教としての生命を失はしむるに至つた所以である。卽ち彼の宗教は、畢竟するに他人に對する愛を義務と心得よと教ふるところの道德説に過ぎざるものであつて、眞實の意義に於ける宗教とはいひ兼ぬるのである。このことは彼自らも後年漸く自覺するに至り、或は Positivist Calendar を設けて、人道に貢献せる世界的偉人の崇拜を勸め、或は地球を Great Fetisch とし、空間を Great medium とし Great Being たる人間と併せて之を人道教の三位一體と名け、或は加特力教より神學を控除せるものは卽ち人道なりと説いて、次第に本來の宗教に復歸し來れるが如く思はるゝのである。

最後に、彼は其人道教を以て、其經世論に於ける秩序と進歩との調和を策せんとせることは、初に叙べしところではあるが、これもその宗教が單なる道德説に止る限りは、徹底的效果を期するわけに行かぬのである。しかしその趣意に對しては、固より異議のないことであつて、社會の秩序と個人の進歩とは、その本質上、互に撞着を免れぬものであり、この間に調節を全うせんとせば、一に宗教に賴るの外はないと信ずる。このことは此に細説を避くるけれども、今日の如く、自由の要求と、秩序の統制と、相衝突するが如き事例が屢々起り來る社會にありて、宗教を要むるの聲が稍く

盛になりつゝあることは、決して偶然のことではないと思ふ。

八

コムトの宗教論は、既に歐西の學者によりて屢批評を受けしものであつて、その說く所に幾多の難點を有するものなることは、實は今更いふまでもないことである。殊にそれが宗教としての本質的缺陷を包藏することは、コムトの提說以來今日に至るまで、何等宗教的勢力を有するに至らぬ事實が何よりも明に之を證明して居る。併しそれにも拘らず、今茲にその所說の大要を叙說批評せる所以は、かくの如き考へ方は、獨りコムト若くは彼れの信者に限らず、假令それが明なる宗教として意識せられずとも、現に可なり多くの人達の思想を支配しつゝあるものでなからうかと考ふるからである。乃ち此の類の思想の最も代表的のものとして姑くコムトの所說を藉り、聊か自己の所見を陳べて示教を仰ぐ次第である。

（參考書要目）

A. Comte : Discourse on the positive Spirit.
A. Comte : General View of positivism.
A. Comte : Fundamental principles of the positive philosophy.
E. Coird : Social philosophy of Comte.
J. B. Crozier: Civilization and progress.